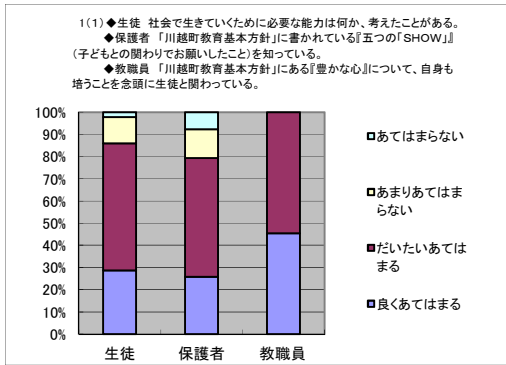
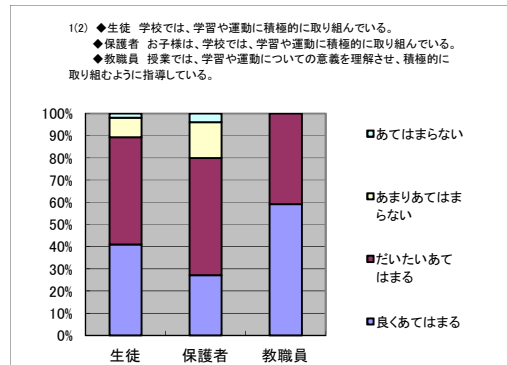


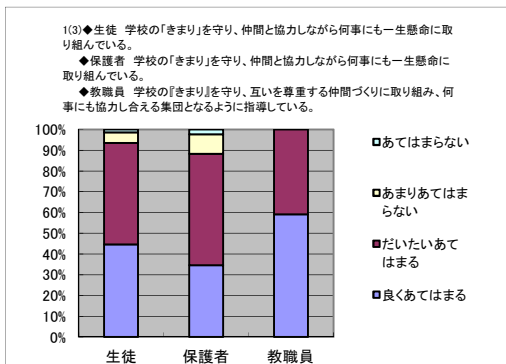
令和5年度12月実施:教育活動に関するアンケート:生徒・保護者・教職員比較



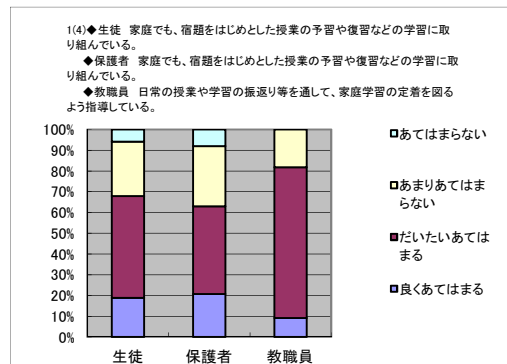
どの学年も14%程度の生徒が、社会で生きていくための能力について意識できていない。これはどの学年もキャリア学習や進路学習に取り組んでいるが、社会に出ることを積極的に考えていない生徒がいたり、将来と今を結び付けて考えられていない生徒がいたりすることが原因として考えられる。日常生活でも、今取り組んでいることやつけるべき力が社会でどのように役に立つのか具体的に触れながら指導を続けていくことが必要である。保護者の数値79%は「川越町教育基本方針」を目にする機会が低いことによるものと考えられる。今年度は三者懇談会でプリントを直接渡していたが、そのような取り組みを学校から発信するなど継続していく。教職員については、全職員が肯定的な回答である。教師の想いや粘り強い指導を継続することで、学校生活で取り組んでいることや心掛けるべきことが社会で生活していくことにも繋がっていくと生徒たちに伝え続けていきたい。令和6年度の学校教育目標を、町の教育基本方針同様に『豊かな心』の育成につながる内容へとつなげていきたい。



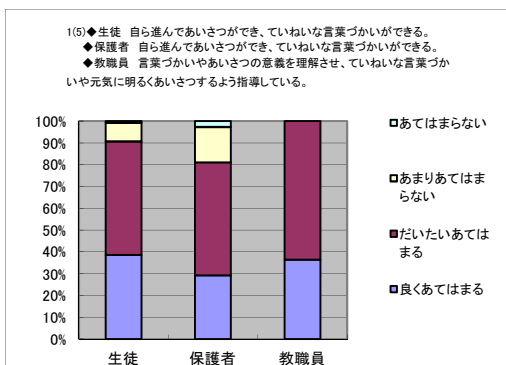
生徒の肯定的意見は昨年度と変わらず約90パーセントで、積極的に学習や運動に取り組んでいることがわかる。三者を比較すると保護者の評価が最も低い傾向にあるが、それでも肯定的意見が約80パーセントとなっている。また、教職員の「良くあてはまる」「だいたいあてはまる」が全体を占め、取り組みに対する姿勢に満足を示している。教職員は積極的に行動したときの効果やよさを生徒に意識させ、実際に積極的に行動できた際にはしっかりと褒めることで、前向きな雰囲気を持続して作っていく。また、教師間での気づきや発見を共有し、生徒にとって学校生活が充実したものになるようにしていきたい。学習面では「わかる・できたと思える授業」を大切に取り組みの成果でもありと考えられる。



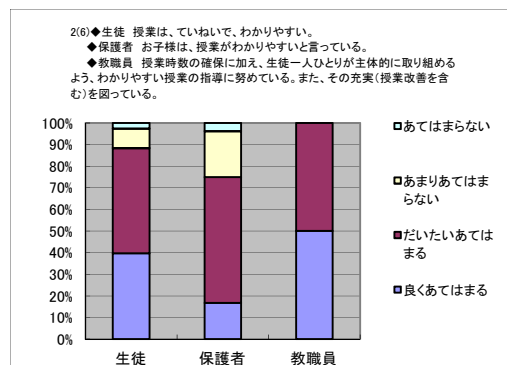
肯定的意見が生徒においては93%と、前年度と同様に高い数値となっている。教職員の共通認識のもと、「きまりを守る大切さ」や「仲間づくりの大切さ」を通信やHP、行事等を通じて発信し続けている成果であると考えられる。生徒にとっての学校生活は充実していると考えられる。保護者の認識も、他の項目よりもこの「ほん気」に対する肯定的な回答が一番高く、学校・家庭ともに、自分本位な考えではなく他者と共同的に生活する力がついていると考えられる。コロナによって縮小傾向であった行事への取り組みも、学校、保護者の連携と協力によって生徒の努力が出来る機会を意図し増やしていったことが、その結果として学校を明るく活気づける要因となっている。



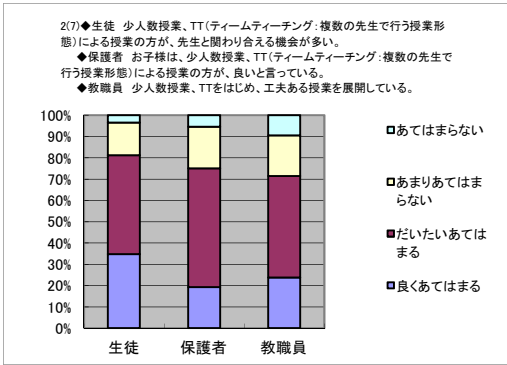
生徒は肯定的な回答が昨年の65%から68%と向上している。しかし、依然として低い水準である。一方、教職員の約81%が肯定的な回答をしていると思えるが、生徒の実態は宿題や提出物などの家庭学習の習慣がない生徒が一定数おり、粘り強くやりきることがついでない生徒もいるという課題が見られる。教職員の生徒への意識との乖離がみられるため、その差を意識した粘り強い指導が必要である。また、保護者についても約63%と低いことも課題である。保護者から意見を上げるなど、保護者の協力は家庭学習習慣の向上に大きくつながると思うので、通信や三者懇談会などで、家庭学習の取り組みの周知を行ったり、タブレットを意図的に活用した課題など自主的に取り組める内容の検討も必要である。



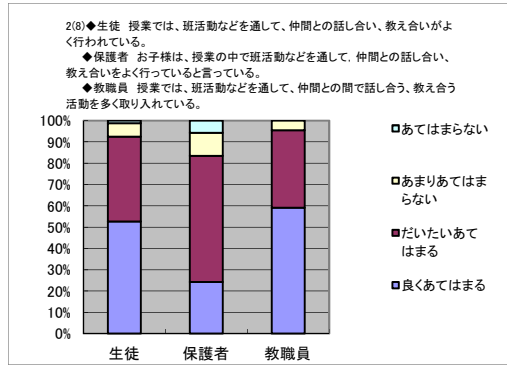
昨年度の85%から約90%の生徒が進んであいさつができ、ていねいな言葉づかいができるという回答があり、生徒が進んで挨拶を行っているといえる。これは、生徒会、代議員によるあいさつ運動や日頃から教職員からもどんどんあいさつをしている日常の成果と考える。保護者は、生徒、教職員と比べて約81%と低くなっているため、保護者の実感との差異を埋める努力をすべきである。また、保護者の方々にも学校の取り組みが伝わるよう、学校での日々の生活や部活動でのあいさつや言葉づかいの指導は継続していくことが重要である。また、地域とともに、あいさつ、声かけを行っていく必要がある。



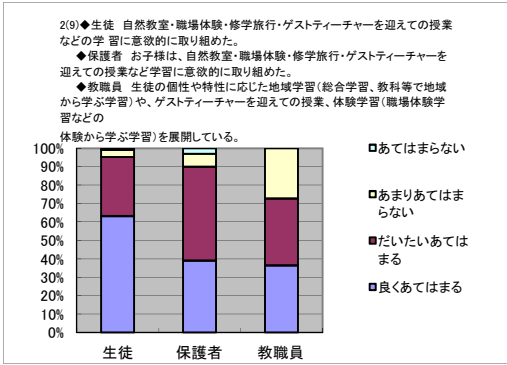
生徒の満足度は昨年と同様に90%近い。保護者の満足度も昨年度とほぼ同様で75%ほど。昨年度から授業公開が再開し、今年度は、授業参観を人数制限をせず授業の様子を見ていただく機会が増えたことや、HPや学級・学年・学校通信などで取り組みを積極的に伝えてきたが要因であると考えられる。行事等を参照することで生徒の実情を知っていたことも理由の一つであると考えられる。今後も「わかる・できたと思える授業」を大切に、学校の取り組みを伝え、生徒、保護者、教職員のギャップを埋めるべく、より一層、日々の研鑽に励む必要がある。



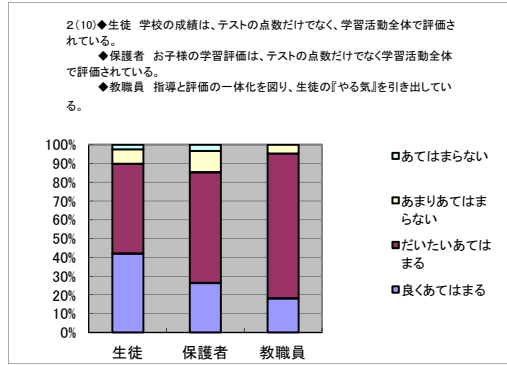
生徒の満足度は昨年度と同様に80%を超える値となっている。また、保護者の満足度も昨年度とほぼ同じで75%である。今年度の少人数やTTが充実したものとされているとともに、授業参観で少人数やTTの授業の様子を見ていただいたことも要因の一つであると考えられる。一方、教職員の数値が昨年度の91%から71%に下がっている。今年度は教職員数の影響もあってTT等を組むことが難しくなった現状もあるが、教職員がお互いに授業を見せ合ったり、OJT等も行いながら個人個人の良い点・改善点を明確にして授業づくりに生かす必要がある。その他にもさらに生徒のつまづきや基礎基本の定着を進めるためにも少人数やTTでの工夫した授業改善が必要である。



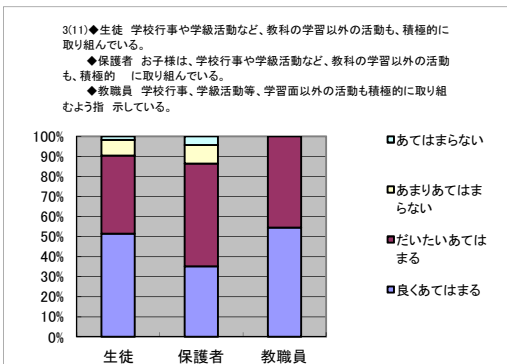
生徒の満足度は昨年同様92%と高い数値になっている。生徒は班活動やペア学習など仲間との話し合いにより授業が行われていると実感している。普段の学校生活の中から班活動を大切にしていることが要因であり、「仲間づくり」を土台とした学びを創り出してきた成果である。保護者の満足度も、昨年同様80%を越え、授業の様子を学級通信等で理解をいただいたことが要因の一つである。教職員の数値も昨年度同様90%を越えている。教員一人ひとりが「めあてとふりかえり」を大切に「対話的で主体的な学び」や「仲間づくり」の研修を深め、今ある姿と照らし合わせ、実践を行った結果であると感じる。教職員がお互いに授業を見せ合ったりすることで、良い所や改善点を明確にし、授業づくりに生かしていく必要がある。



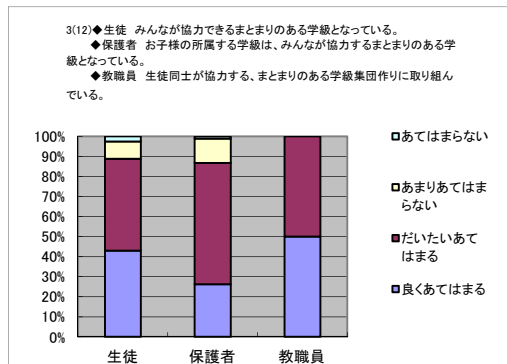
生徒は96%と高い割合であるように、今年度はすべての行事を本来の形で実施することができたことが背景にある。そのため行事への期待値も高くなり、生徒は今まで以上に行事に意欲的に取り組み、楽しんで学んだりする姿につながったと考えられる。保護者の肯定的な回答も90%と高く、家庭で生徒から感想を聞いたりホームページや各通信で生徒の様子を継続して発信したことの成果と考えられる。一方、教職員は約73%と低めの水準である。今後は行事を通じてつけさせたい力を明確にし、各学年の実情に応じた取り組みを継続していく点ではもう工夫必要だと感じている教職員が多い。行事を実施して終わりではなく、今後の学校生活につながる取り組みとして進めていく必要がある。



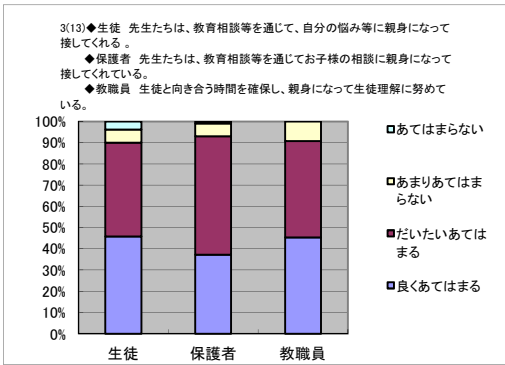
教職員の満足度が昨年とほぼ同じで96%となっている。新学習指導要領が施行され、研修を積んできており、指導と評価の一体化がしっかりと定着してきている。生徒は90%近くの満足度であり、保護者の結果も昨年度同様86%であることから、シラバスや評価の方法を生徒・保護者に周知し、評価規準・基準や授業の中での評価の観点を明確に示していることも要因の一つであると考えられる。また、評価を通知表の結果だけでなく、定期的に学習活動を評価していくことで、日々の授業の積み重ねを大切にしていることで、常に授業改善の視点を大切に「誰も一人にしない授業」を大切に授業づくりを進めていく必要がある。



満足度を比較すると、生徒と教職員に関しては肯定的な意見が90%以上と、生徒が主体となった活動が展開されている様子が伺える。保護者の満足度は二者を下回る結果となっているが86%であり学校側の働きかけが上手くできたようだ。今年度は学校行事を中心として、「命の大切さ」を伝える講演会や「キャリア教育講演会」等に対する保護者に案内文書を出し、直接学校に来校して生徒の活動の様子を参観する機会が増えたのもその原因である。また、全ての学級で学級通信が発行され、通信を通じて、生徒の活動の様子が活発に発信された。発信力という点では参観には及ばないかもしれないが、各通信やホームページ等で発信を継続し、保護者に生徒たちが仲間とともに積極的に活動に取り組んでいる様子を知らせていき、否定的な回答の割合を減らしていきたい。何よりも、生徒自ら家庭において、学校で頑張っている様子を伝えたい、話をしたいと思活動につなげていきたい。

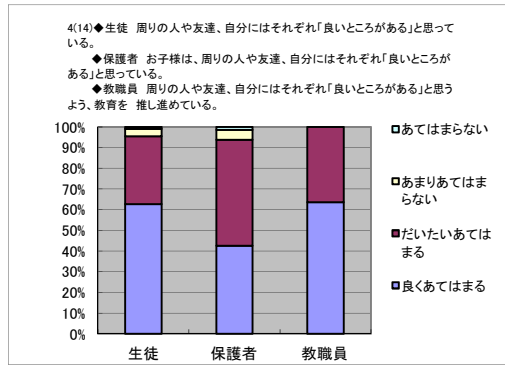


三者ともに満足度は高く、90%近い数値となっている。そのため、現在取り組んでいる「仲間づくり」を土台とした活動を継続していくことが、生徒たちの意欲や学級づくりに繋がっていくと考える。その一方で、「あてはまらない」と答える生徒と保護者がいることも受け止めてはならず、そう感じられる原因をまずは教師が見直していく必要がある。取組自体が良くないのか、取組への理解がされていないのかによって、取るべき方針は変わってくる。いずれにせよ、生徒や保護者への理解や実感、教師の意識は、我々がアンテナ高く教育活動に対して取り組んでいかなくてはならない。多くの生徒がクラスに対して前向きな関わりを通して人権が大切にされる「仲間づくり」を柱として、一人一人を大切に学校づくりを進める。



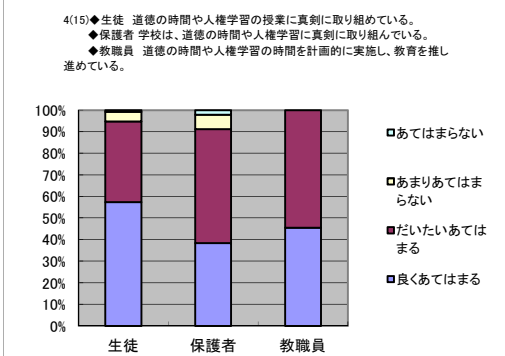
肯定的回答をしている生徒90%、保護者共に92%という結果はこの数年とほぼ同じであった。しかし、前年度は「あてはまらない」と答えた生徒が1年生2人、3年生4人であったが、今年度は1年生13人と増えており、学校全体でわずかながら増加傾向にある。また、「あまりあてはまらない」と答えた生徒も全体で46人おり、前年度より増加している。このような傾向を見逃すことなく、肯定的な高い数値に満足せず、来年度以降も教育相談の機会をしっかりと確保していく。

教育相談の機会だけでなく、子どもたちの様子や変化を職員室で活発に交流できる環境や何か起こってから保護者に伝えるのではなく、日ごろから子どもたちの良い姿も積極的に通信や保護者に発信していくことも大切にしたい。また、日頃からデイリーライフや放課後等の時間も使い、日常的に多くの生徒と関わる機会を意図的に増やし、「子どもたちとの関係を築く」ことを常に意識したい。そして、学校教育ビジョンにもあるように、「生徒に寄り添う生徒理解の充実」に努めたい。

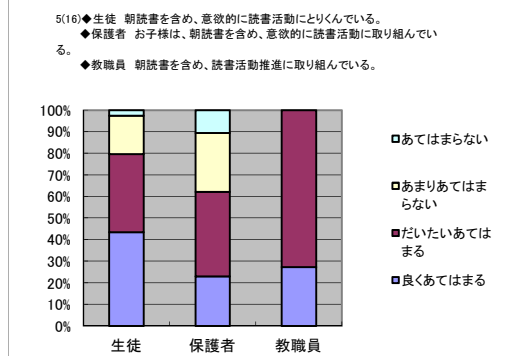


前年度、今年度ともに生徒・保護者の肯定的な回答が95%となっている。「あてはまらない」と回答している生徒は2年生に入入、3年生に1人いる。教職員の回答は、否定的な回答が令和4年度と同様、0%となっており、「周りの人や友達、自分に良いところがある」と生徒が思えるような、自己肯定感を高め実感できる教育を推進している。教師自身が互いの良いところを認め合うという意識のもと、普段の生徒との関わり、授業、道徳教育に取り組んでいると考える。

3年前から学校全体で行っている学級通信・学年通信等を活用した「見つめる」「語る」「つなげる」取組が、自他の思いを共有し、他者をより知ることができるとつながっていると考えている。学校教育ビジョンにある「認め合う・支え合う環境づくり」を日常の学校生活を通じて、「日々の日常が人権学習」という視点で学校全体に進めていける研修計画を立て進めたい。

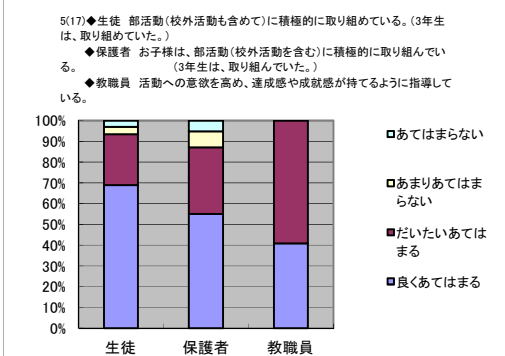


令和元年度から5年度において生徒や保護者の90%以上が道徳や人権学習に真剣に取り組んでいると回答している。また、教職員は100%取り組んでいると回答している。中でも令和4年度の生徒94%、5年度が95%というように学校全体として「道徳」や「人権学習」が根付いてきたのがわかる。これは「関わること」を通して人権が大切にされる「仲間づくり」を土台として、一人一人を大切にしようとする意図した取り組みが生徒・保護者に理解されてきたことがあげられる。そして、計画的に人権学習と道徳の授業数・内容等の見直しをもって取り組むことができた成果でもある。今後も道徳・人権学習ともに「生徒にどのような力をつけたいのか」を明確にした上で、指導計画を余裕をもって検討、生徒が自分事として向き合っ真剣に考えられる教材の工夫と発問の工夫をより一層進めていく必要がある。

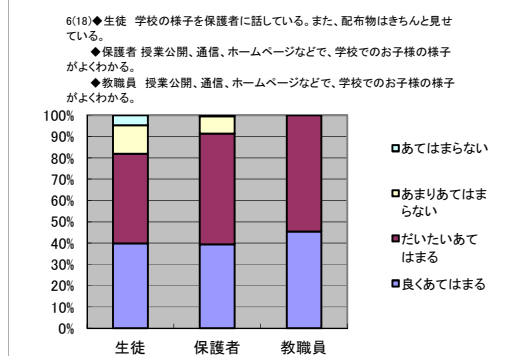


令和5年度から新たに新設された項目であり、読書活動は言語習得にも大きくかかわるため大切にしていきたい活動である。読書活動を意欲的に取り組んでいると答えた生徒は約80%。しかし、保護者の認識は約60%とかなりの開きがあった。教職員の認識も、あてはまる、だいたいあてはまるは100%という高い数字だが、読書を「積極的」(主体的に、たくさん本に触れる)に取り組んでいるかという点では、100%といえない現状があると多くの職員が感じている。

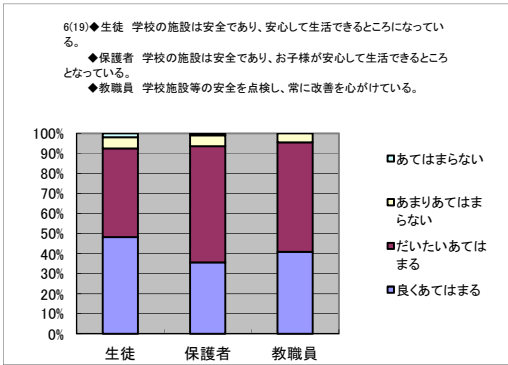
朝の読書では、一年を通して同じ本を読み続ける生徒や学級文庫から毎日違う本を借りて「見ているだけ」の生徒も見受けられる。読書の目的を職員、生徒でもう一度確認していきたい。しかし、読書活動推進についての成果も表れてきた。図書館司書と生徒図書委員が主催する「ブックバイキング」を年間5回実施したり、PTAと一緒に開催した「今すぐにも本を手にしたくなる話」と題した講演会等によって図書室に行ってみたいと思える動きかけができた。



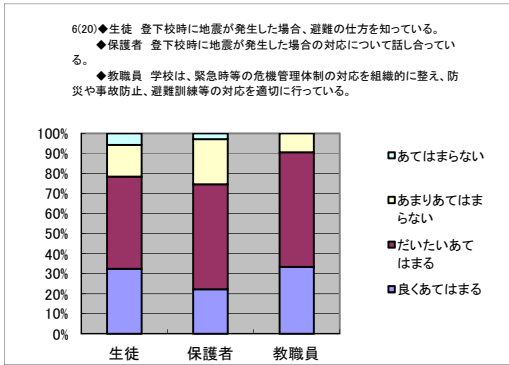
一昨年、昨年度同様に生徒94%・保護者は92%・87%という高い数値で概ね満足感・達成感を持っているように感じる。「達成感や成就感をもたせる・学年の枠を超え、人間関係の形成・社会性の育成」の視点で顧問が継続的に指導した結果であり、部活動を教育的な位置づけで大切にできた本校の強みともいえる。「部活動がイデオロギ」に沿って、決められた時間で部活動を楽しみ積極的に参加できるよう、内容の工夫や場の設定、支援の在り方を考えてきた成果であるとも考えられる。しかし、令和5年度「積極的に参加できているか」の質問に生徒の5%前後、保護者の10~15%が消極的に回答。部活動に対するの現状の考え方も言える。教職員は「積極的に参加できる指導している」の質問に対して肯定的な回答のみとなっている。「積極的に頑張っているか」という認識に対して少しはあてはまる必要がある。また、少数ではあるが部活に消極的な生徒へ目を向けていく必要がある。また、本校の部活動参加における現状は、校内活動または校外での活動に所属することが原則であるが、校外活動を希望する生徒への対応はこれからは柔軟に対応していきたい。部活動地域移行などから部活動の参加が任意になる学校も増えていくことが予想される。改めて部活動の目的や学校での位置づけを教員で共通認識を持つことが大切である。



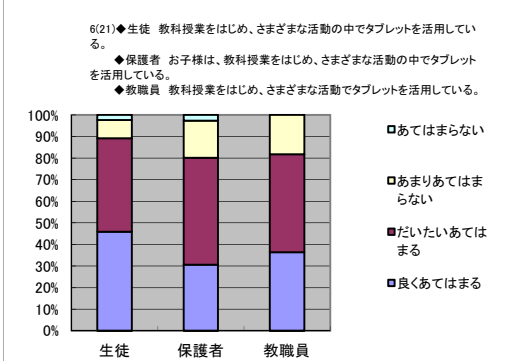
生徒82%、保護者91%、教職員100%というように高い数値となっている。今年度も昨年度に続き体育祭や文化祭などの大きな行事において全校一斉での保護者参観が可能となったことや、職場体験学習や保育体験学習などの地域との連携・協力をいただいた活動ができたことも高い数値と関係している。また、授業公開を定期的に行ったり、様々な講演会においても、すべての保護者に案内文書での参観を募るなどの働きかけは効果的であった。日頃から教職員・保護者が互いに電話などで連絡を取り合い、学校や家庭での生徒の様子を可能な範囲で共有したりしていることに加え、学校・学年・学級通信、進路通信、保健たより、生徒指導だより等の発行する意図を持っている継続した通信の作成(2学年では毎日の通信発行)・配付が保護者の高い数値につながっていると考えられる。さらには、生徒と先生方の日常の頑張りをホームページでも頻繁に更新することで、アクセス数も増加しており(4月から65万アクセス)、保護者をはじめ地域の方からも学校の様子・教育活動を知ってもらえるのも要因だと考える。一方、「学校の様子を保護者に話さない、また配布物を渡していない」生徒が18%いる。昨年度に比べ4%増えているが、日頃の継続的な声かけと合わせて、生徒が1日の学校の様子を話してみたい・伝えたいと思えるような教育活動を展開することが大切である。



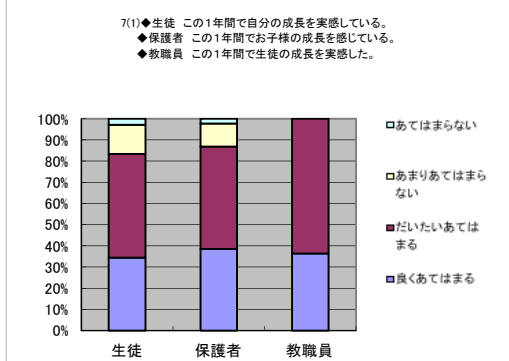
生徒・保護者ともに92%・94%という高い数値で大きな変動はない。この数値から生徒は安心感をもって学校生活を送れていることが伺える。教職員が高い数値であるのは、校舎の老朽化はあるが、危険箇所などについては教頭を中心とする教職員が随時報告・修理対応しているためだと考えられる。しかし、校舎の老朽化等が進み、教室や廊下での雨漏りやトイレの水詰まり、防火扉に不具合が生じたりするなど、指導や自助努力の範囲を越えているという側面もある。新校舎設立に向けて話が進んでいるが、現校舎で生徒を預かっている以上、安全安心に過ごせる学校を目指していくため、現状の改善に向けて随時報告し続けていく必要がある。一番大切なのは、仮設校舎へ学校生活の拠点が変わるまで、伝統ある川越中学校現校舎に感謝の思いを持つとともに愛情を持って大切に利用すること。日々の清掃活動を全員で一生懸命に頑張る心を持った生徒を育てたい。



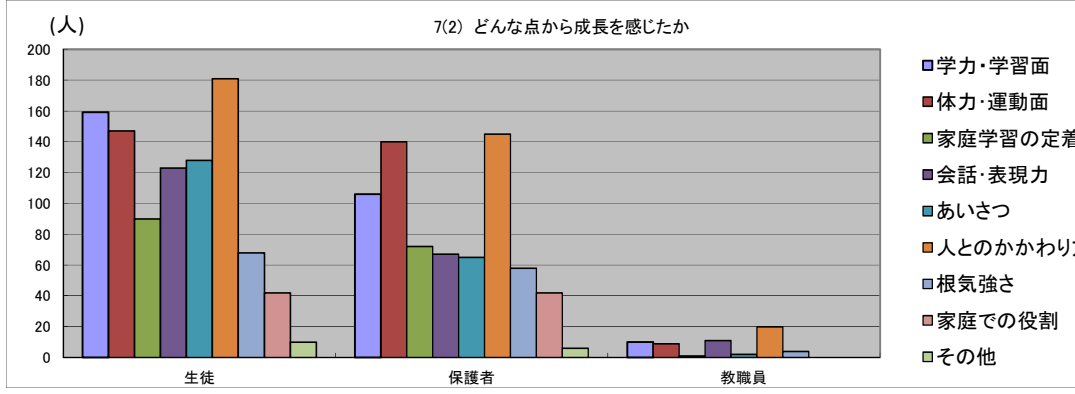
生徒の数値は78%となっているが、22%の生徒が登下校時に地震が発生した場合の避難経路がわかっていないという事実がある。この項目に関しては大切な命が関わっているものなので、登下校時といえども、避難経路がわかっていない生徒が22%ということを重ね受け止め、限りなく100%に近づけなければならない。また、保護者の数値が75%ということで登下校時の避難の仕方について話をできていない家庭が25%という事実がある。学校での避難訓練や4月の地区別集会などで生徒に直接指導しているが、学校側から家庭に直接指導できる機会は少ない。そのため、生徒を通じて話し合う場の設定などをしていくことも必要になってくる。昨年度から始めた「第3次避難箇所」である朝日町民グラウンドへの避難訓練を継続していく。また、学校だけでなく「防災・減災への啓発(今年度では第40号)」を続ける。



令和5年度から新たに新設された項目であり、「一人一台タブレットの活用」は学力向上にも、教職員の授業改善、学びの質の向上、日々の業務改善にも大きくかわかっていく本校でも重要な位置づけとなるものである。「教科授業をはじめ、さまざまな活動でタブレットを活用している」という設問に対して、「良くてはまる」「だいたいあてはまる」と回答した割合は生徒は89%、保護者は80%、教職員は82%と肯定的な回答が高い割合となっており、特に3年生の生徒の「良くてはまる」「だいたいあてはまる」と回答した割合が99%という数値になっている。  
 帰りの学習だけでなく、日々の授業での活用が各教科、各学年、委員会、部活動などすべての教育活動での使用が日常となってきた。このように積極的なタブレットの活用が進められていると考える。そして、生徒がタブレットの活用が教科書と同じように、その活用が日常となっている。それに対し、保護者の肯定的な回答の割合が生徒に比べて低いのは、家庭学習での課題があげられる。タブレット端末の持ち帰りの初年度ということで、なかなか活用ができなかった。来年度に向けて、家庭学習での活用も積極的に進めていく必要がある。



昨年度同様に、今年度も設問に対して「良くてはまる」「だいたいあてはまる」と回答した生徒の満足度は83%、保護者は85%、教職員の100%が、と肯定的な回答となっている。これは成長を実感できる取組を意図して進められたことも考えられる。更に学年別で生徒の様子を見ると、1年生が86%、2年生が80%、3年生が84%となっている。引き続き各学年の継続した「人権学習」や日常の「仲間づくり(クラス・トーキングなどの活動)」を通して、生徒が成長した姿を実感できるような取組を学校全体で系統的に進める必要がある。  
 本校の学校教育ビジョンにもある「関わることを通して、人権が大切にされる「仲間づくり」を柱として、一人一人の子どもたちを大切にす取り組みを継続する中で、仲間とともに成長を実感できる教育活動を展開していきたい。



「人とのかわり方」にの設問に対して、1年生では61名、2年生では61名、3年生では59名が回答し、すべての学年においてこの項目が一番大きく表れている。また、半数近い生徒が「人とのかわり方」に回答している。これは本校の教育ビジョンにも明記してある「関わることを通して」につながっている。毎日の振り返りを言葉にして自分を見つめる活動を進め、学年通信や学級通信を通じて「仲間の想いや考えに触れ・共有」することを積み重ね、学期ごとにすべての学年で取り組むクラス・トーキングを重ねてきた結果であると考えられる。本校の人権教育でめざしている「仲間とのつながり」について、生徒も保護者も教職員も成長を感じていることが示されている。それに伴って、「学力・学習面」「体力・運動面」「会話・表現力」「あいさつ」に成長を感じている生徒の回答数は多い。これは、「人とのかわり方」を基に、「学力・学習面」「会話・表現力」も成長しており、「主体的・対話的な深い学び」が徐々に定着してきた成果と考える。これらをベースに学力の向上を図っていききたい。一層、「関わることを大切に積み重ね、クラス・トーキングを多くの学年で取り入れていきたい。  
 ここ数年の課題に挙げられるのは、「家庭学習の定着」「根気強さ」である。学習課題の与え方を工夫し、より具体的な方法を含めて提示し、保護者にも伝え、家庭の協力も得ながら進めていく必要があると考える。あわせて、常に授業改善の視点を持ち、生徒が自ら進んで学びたいという意欲を湧かせるような授業づくりをさらに進めていきたい。川越中学校の生徒が日々の学校生活の中で、仲間とともに成長を実感できる取組につなげていきたい。